赤と緑と青と

岸ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤と緑と青と

【Ｎコード】
Ｎ５６０６Ｆ

【作者名】
岸ちゃん

【あらすじ】
町に殺人事件が多発し赤い殺人鬼の噂が立った。ミステリ研究部の岸原は後輩の西村に誘われ殺人鬼について調べる事なる。

プロローグ（前書き）

はじめてなので解りにくければ言って下さい。

プロローグ

聞き慣れたチャイムがなる。
「ふあ～よく寝た～」
俺は机に伏せた体起こした。
教卓を見ると数学教師の澤田が教科書を片付けていた。
俺の名前は岸原真治、高校三年だ。俺は実家の工場で働く事になっているので他の奴らより気楽に授業に出ている。
「ハラシン～よく寝てたね～」
後ろから友達の木村が話し掛けてきた。
ハラシンは俺のあだ名だキシハラシンジの真ん中を取りハラシンだ。
「俺は実家の家業を継ぐからな。それほど真面目に授業を受ける必要がないんでな」
「受験勉強とかしないだよね。いいな～」
「そうでもないぞ。即戦力にしたいのか親父が色々としごいてくるからな。昨日も余り寝てないんだ。だから、眠い眠い」
「ふ～ん、ハラシンも大変だね。」
「だから学校には逃げに来てんだ」
「ふーん、僕も塾があってね。そこは厳しくて。学校はいいよ。時間がきっちりしているからね」
「馬鹿は帰してくれないってか？」
「そうだよ～夜遅くなると怖くてね」
「最近、殺人事件が近くであったとか言ってたからな。気をつけろよ」
その時横の席から
「なんでも犯人は真っ赤な怪人らしいよ」
と声がかかった。
「怪人ってなんだよ。尾形」
俺は少し笑いながら聞いた。

尾形は眼鏡を掛けて真面目そうな奴だ。しかしこうゆうオカルトじみた事が大好きでもある。
「目撃者によると犯人は薄暗い路地裏でもはっきりわかるぐらいに赤かったそうだよ。そして三メートルぐらいの壁を一飛びにしたそうだ。」
「ちっとうさん臭いな」
と言うと
「そうだね。赤いのはともかく、幾らなんでも三メートルは無理でしょ」
と木村が同意した。
「ま、噂だからな。多分殺人事件が最近多くなっているから出来た噂だろ。」
尾形も余り信じてないようだ。
「あ！もう塾の時間だ！じゃあねハラシン、尾形」
「おう！また明日」
「さようなら木村君」
木村が教室から出て行った。
「お前は勉強しないか？」
「僕は面接でね。今の成績だとほぼ大丈夫だよ」
「なるほどね。じゃあ部活にでも行こうぜ」
「そうだな」
俺は尾形を連れて教室を出た。
俺と尾形はミステリ研究部で尾形が部長をしている。俺が入った時はほぼ活動していなく楽そうだと思い入ったのだが尾形ともう一人の三年の坂元が張り切って活動したため一年の時は四人しかいなかったのに三年になったら部員が倍以上の九人になってしまった部だ。そして俺は尾形とは仲がよくなり辞めにくくなってしまった。
部室に入ると
「部長！岸原先輩！赤い殺人鬼って知ってますか？」
西村紗耶香が言った。

西村紗耶香は今年入ってきた新入生で不思議な事には目がない性格だ。かなりわがままで俺はともかく尾形も結構振り回されている。
「赤い殺人鬼？真っ赤な怪人の事かな？」
「多分そうです。最近ちまたを騒がせている殺人事件の犯人の事です！」
「ふーん、今はそう呼ばれるのか」
「おい！西村まさかそいつを探そうとか言うんじゃないだろうな！」
関心している尾形を退けて俺は言った。
「そのつもりですけどダメですか？」
「女の子が夜の一人歩きはダメに決まってる。ホントに殺人鬼になんかに会ったら殺されるかも知れないよ」
必死に尾形が説得する。
「ですから先輩方にも来ていただきたいのです。大人数だと安全ですね」
「一人で探すよりは安全だと思うけど……夜に出歩か無いのが一番安全なんだけどな～」
「大丈夫です。一年の他の三人は来ると言ってますし」
自信満々に西村がいう。
俺からすれば危険より面倒で仕方がない。
「なあ、尾形」
「なんだい？」
「行きたいんなら一年の連中だけに行かせばいいだろ」
すると尾形は少し怒って
「一年だけで行かせられる訳ないだろ！」
と言った。
そこで怒るなら西村を止めろよな、と少し思ったが西村は言い出したら聞かない性格で下手に禁じたら一人で行ってしまう可能性もある。ここはせめて大人数で行くしかないと思ってるだろう。
「岸原、悪いけど付き合ってくれないか？」
「本気かよ！嫌だぜ俺は」

「頼むよ。僕一人じゃ一年の四人を面倒見切れない」
「ハァ～やれやれ、仕方がないな。わかったよ」
どうせ家に帰っても親父がうるさいし、それに帰りに尾形家に寄って時間を潰そうと考えていた。
「二年も誘おうか？」
尾形が尋ねると
「ダメですよ！あまりたくさんいたら殺人鬼が出て来れないいかも知れないじゃないですか！少数精鋭じゃないと。ですから六人で行きましょう」
「わかったわかった、でいつ行くんだ？」
俺が聞くと
「今日行きましょうよ！」
「えらく急だな。そう焦るなよ」
「思い立ったら吉日て言うじゃないですか」
「わかったよ。じゃあ僕が少し調べてくるから詳しくは後でメールするよ」
「お願いします！部長！」
「出来るだけ早めに頼むぜ」
……

プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただけたら何か感想を書いていただけたら幸いです。

第一話　無（前書き）

この話は殺人鬼を倒す話じゃありません。
殺人鬼に殺される話でもありません。

第一話　無

夜の八時頃に尾形からメールがあった。一応親父には部活の最後の思い出作りをすると言ったので朝帰りでも問題ナシだ。
［夜の十時に学校前に集合。遅れないように］
結構遅くなりそうだ。
俺は黒いジャンバーを着、夜十時まで外で暇つぶしする事にした。
……
十時十五分前
集合場所に行くとすでに尾形が来ていた。
「流石に早いな」
とつぶやき声をかけた。
「よう。一番か？」
「ああ、岸原か時間よりこんなに早く来るなんて珍しいな」
「する事がなくてな。他の奴らはまだか？」
「多分もうすぐ来るよ」
「ところでよ」
「ん、何だい？」
「結局殺人鬼はいるのか？それともいないのか？」
「う～ん……新聞やインターネットで調べたけど最近この町であった殺人事件はたしか全部で二十四件だったよ」
「まじか！そんなに死んでるのかよ！」
「隣の町を入れるともっと多いよ」
「ふーん、じゃあやっぱ居んのかな…殺人鬼」
「そうだね…幾らなんでもこんなに短期で殺人犯がたくさん出て来るなんて少し考えずらいから、恐らくすべて同一犯のしわざか複数だとしてもせいぜい五人までだと思う。」
「一人だとすると一週間で二十四人殺してるんだ。随分立派な殺人鬼だな」

「それにね少し気になる事が有るんだ」
尾形が何か言おうとした時
「部長～来ましたよ～！」
西村と一年の高原、宮本が走って来た。
高原は高原裕司と言い尾形似てかなりのオカルトマニアだ。
宮本は宮本和人と言い体格がかなりでかく昔は喧嘩でかなり自信があった俺が見ても少したじろいでしまう程だ。
「後は矢島か」
俺が言うと
「彰子、まだ来てないんですか？」
西村が尋ねた。
「うん、集合時間になっても来なかったらメールで確認するつもりだから」
「わかりました」
「部長！絶対に殺人鬼を見つけましょうよ！」
高原が張り切って言った。
「う～ん流石に一日や二日探したところで見つかるとは思えないな。まあ気長にいこう」
尾形が答えると
「もし殺人鬼が出てきてもら俺がとっちめてやるから安心しろよな」
宮本が言った。
「すみませ～ん遅れました」
矢島が走ってきた。
矢島は矢島彰子と言い西村とは、幼なじみで西村ほど活発では無いがひそかにかなり無茶な事をしている。
「大丈夫ぎりぎりセーフだよ。じゃあそろそろ行こうか」
尾形か号令をかけた。
「まずは何処に行くんですか」
西村が尋ねるた。
「まずは事件現地に行こうと思う異義はあるかな？」

「「ありません」」
西村と高原が同時に答えた。
……
移動中、俺は尾形の気になる事を聞いたら尾形は小声で
「実は赤い殺人鬼の目撃者がいただろ。彼を探そうとしたら目撃した三日後に喉を潰されて見つかって……今は入院してかなりヤバイそうだよ。」
「マジかよ！大丈夫なのか？下手に見つけたら殺さるかもしれないんだろ？」
「大丈夫大丈夫、だって昨日に殺人鬼が出た場所から今居る所って町の反対だもん」
「……おいおい」
「殺人鬼は確かに気になるけど部員の安全には変えれないよ」
「まあ、それもそうか」
「そうそう。彼女が飽きるまで付き合ってやろうじゃないかどうせ僕らは暇なんだし」
「わかったよ」
……
「ここだよ」
尾形が言った。
そこはいかにも何か出そうな路地裏だった。
「こりゃ殺人鬼じゃ無くて、被害者方が出てきそうな場所だな」
俺の一人言に
「こういう場所の方が満足出来ると思ってね」
尾形が小声で言った。
「よし！じゃあみんな暗いから僕の後ろを離れないように。岸原は後ろで誰か逸れないように見といてくれ」
「ん、わかった」
……
三十分程歩いていると

「誰もいませんね」
西村が尾形に話し掛けた。
「まあまあ、そう焦る事ないよ。そんなに殺人鬼にぽんぽん出会えたらこの町の人口一日で半分になってしまうよ」
「そういう意味では無くてですね。こんな人の通りが少ない所に……いやこんな全く人が通ら無い所にホントに殺人鬼が居るのですか？」
「あ～いや……それは」
「そういえばそうですね。人が居なければ人を殺せませんから」
矢島も同意した。
「えっと……」
「きっと慎重な奴なんだろ」
答に詰まった尾形の変わりに俺が答えた。
「それに、ほら殺人鬼が出た事でこの辺り住民が警戒してるかも知れないだろ」
「そうかも知れませんが……」
すかさず尾形が
「まあ今日の所はこの辺り見てまわろう。他の場所についてはまた今度僕があらためて調べておくから」
尾形の意見にとりあえずは納得したのか西村は黙って歩き始めた。
その後午前一時までねばったが殺人鬼も幽霊も人にすら出会わなかった。
……
翌日の朝、尾形家に泊めてもらった俺はとりあえず学校にいった。
今日は木村が学校を休んでいた。一瞬まさかと思ったがただの風邪だと分かりガクッときた。昼休みに俺と尾形は部活の事で相談をしていた。尾形の話によれば昨日行った場所の近くで斧や鉈のような大型の刃物でメッタ斬りにされた死体の一部が見つかったそうだ。
「本当に最近は物騒になったね。岸原」
「まあな、もう夜歩いて安全な場所なんてあんまないんじゃね？」

「しかし、西村は聞かないだろうな……ハァ」
尾形はため息をついた。
俺は尾形の肩を叩きながら
「まあまあ、俺も手伝ってやるから元気だせ」
「ありがとう。じゃあまず次はどの辺に行こうか？」
尾形は鞄から地図を出しながら聞いてきた。
「ん～どれどれ……この赤い丸が事件現地なのか？」
「そうそう。町の大通り以外で安全そうなのは、駅がある町の東ぐらいだろ？」
確かに夜でも明るい町の大通りと駅の周り以外はほぼ全体的出現していた。
「あ！ここ学校の隣じゃないか、こんな所まで出てんのかよ」
「うん。これはもう運に賭けしかないな」
「しかし、気になってたんだか…なんで殺人鬼がニュースで取り上げられない？」
「う～ん……一応取り上げられているんだけど、あまり詳しい情報が公開されないからね。多分混乱を起こさないように殺人事件が起きた！とだけ言って正確な被害者の人数を教えなかったからだと思う。多分解決したら詳しく発表すると思うよ」
「なんでお前はそんなに殺人鬼について知ってんだ？」
「人の口になんとやらって奴だよ。いくら警察が隠蔽しようとしても通報があってからすぐに現場に行けないだろ」
「つまり警察が来るまで死体は晒されるって事か」
「そう、その後インターネットでどこそこで殺人があったと投稿する人がいる。それを数えたのさ」
「俺はネットは検索ぐらいしか使わないからよく分からないな」
「それより今日はどこ行く」
「今日はなぁ～……どこがいいかな」
二人で悩んでいると
「ちょっと、尾形後輩が呼んでるよ」

クラスの中塚さんが尾形に言った。
見てみると矢島が来ていた。
「あ！部長！」
「どうしたんだい？矢島さん」
尾形が尋ねると少し焦ったように聞いてきた。
「昨日行った路地裏、本当に殺人鬼が出た場所なんですか？」
尾形は少し困惑しながら
「そうだけど、どうかしたのかい？」
「私、昨日は集合時間まで殺人鬼について調べていたんです。でもあの路地裏で殺人事件が起きた記録がなかったんですよ」
「全部調べたわけじゃないんだろきっと調べ損ねたんだよ」
「そう思って帰ってから調べました。でもいくら探しても見つからないんです」
「うーん、そうかぁ……じゃあ僕が間違えたのかな」
「きっとそうですよ！」
「アハハ、ごめんごめん、昨日急いで調べたから見間違いしたのかもしれないな」
「それでですね！今日行く場所私が決めていいですか？」
「え！えーと……」
「大丈夫です。しっかり調べてきましたから！絶対殺人鬼に会えます！」
「ちょっ、ちょっと待っててね」
尾形が俺の方に来て
「ど、どうしよう岸原」
「諦めるしか無いんじゃね。矢島頑固だし」
「そ、そんな無責任な」
「でも、多分聞かないだろ」
「ハァ……そうだね」
尾形は矢島の方に向いて
「わかった。じゃあ今日はお願いするよ」

「はい！分かりました。楽しみにしててくださいね」
ため息を吐いている尾形を見ながら
「どうなる事やら」
俺は呟いた。
……

第一話　無（後書き）

無色です。次は赤です。

第二話　赤（前書き）

ここから少しグロいです。

第二話　赤

夜十時俺達また学校前に集まった。昨日と違い矢島が一番だった。
「さあ！行きましょう」
矢島はやけに張り切っている。
「それで今日はどこに行くんだい」
尾形が尋ねると
「町の南に公園があるでしょう。あそこに行きます」
その公園はかなり大きく池や林がある森林公園だ。
「なるほど、あそこは暗いし人気が無いけど、時々散歩に来る人が居るし三日前に殺人があった場所だ」
「えーと、確か石で頭が割られてたんだろ？」
俺が聞くと
「そうそう、確か頭を何か硬い物で殴られて脳が少しはみ出してたそうだよ」
尾形が付け足した。すると
「そりゃグロいっすね～部長」
と宮本が反応した。
「そうだね。僕はできれば布団の上で死にたいよ」
……
雑談をしながら歩くと予想より早く着いた。
「到着しました。さあどうしましょう？」
「じゃあ、散歩ルートに沿って歩こう。」
矢島の質問に尾形が答えた。
「よし、昨日と同じで、先頭は僕で最後尾は岸原で行こうか」
「おう、わかった」
「よし！行こうか。逸れないように」
尾形が歩き始めた。
俺は最後尾につき歩いた。

十分程歩いたら、前に人影見えた。緑のニット帽をかぶった十五、六歳の少年だった。
「君、こんな時間に何してるんだい？」
よせば良いのに尾形が話し掛けた。
「夜の散歩」
少年がニヤニヤ笑いながら答えた。
俺は、嫌な予感がしたが尾形は気にせずに
「最近、この辺は物騒だから夜の一人歩きは控えた方が良いよ」
と言っていた。
ニット帽はニヤニヤ笑いながら
「ハハハ、大丈夫だ。この辺はいつもの俺の散歩コースだからな。殺人鬼が出たって逃げられるぜ」
「でも、三日前にこの辺で殺人事件が起きたんだ」
「何！」
ニット帽の少年は少し驚いた顔をした。
「三日前にこの公園で人が殺されたのさ。死因は頭を硬い物で殴られ、脳に重傷を負って即死だったそうだよ」
ニット帽は少し考えるとニヤニヤした顔に戻り
「お兄ちゃん達こそ何やってんの？殺人鬼が出るんだろこの公園は」
「僕達は、その殺人鬼を探しているんだ」
「なんで？」
「面白そうだからに決まってるでしょ！それに殺人鬼を捕まえたら町の為にもなるじゃない」
西村が代わりにこたえた。
「ふーん面白そうねえ。まあ頑張ってくれ」
ニット帽はニヤニヤ笑いながら行ってしまった。
ニット帽の姿が見え失くなった。
「おい！尾形今の奴もしかしたら殺人鬼と関係があるかもしれないぜ」
「はぁ？何言ってんだい。彼はまだ子供だよ。それに殺人事件の話

を聞いて驚いていたじゃないか」
「だってよ、あいつ殺人鬼の話聞いた後もまだニヤニヤしてやがっただろなんか怪しいぜ。それに絶対自分が殺されるはずないって顔してたぜ。なんか嫌な予感がするしよ」
「私も怪しいと思う。子供と言っても私達とそんなに歳も違わ無いし、殺人鬼が居るかもしれないのにたった一人平然としてた。どう考えてもおかしいわ」
「うん、私もそう思う」
「確かに僕もおかしいと思う」
「あ、えーと、俺も怪しいと思うぜ」
俺の意見に西村、矢島、高原は同意した。多分宮本は周りのノリについて行っただけだろう。
「うーん、そうかな…？」
「殺人鬼じゃないにしても何か知っているのは確かだぜ」
「分かった。今度会ったらそれとなく聞いてみるよ。じゃあ探索を続けようよ」
二十分後
「そろそろ半分か」
俺が一人事を言った。
ガササ……ガサ
「ん？何か林から音がしね」
俺が言うと
「本当だあっちからだ」
尾形が指を指した。
すぐに音がしたほうを全員が向いた。
すると木の後ろから大きな人影がヌッと出て来たそして
「やあ、矢島さんところの彰子ちゃんじゃないか」
とにこやかに話し掛けてきた。
「あ！肉屋さんの」
「小西だよ。ダメじゃないかこんな夜遅くに子供が出歩いたら。私

が家まで送ろうか？」
「えーと」
微かに変な臭いがした……
「すみません」
俺が尋ねた。
「ん？なにかな？えーと」
「岸原です」
「ああ、岸原君ね」
「その袋、何入れてるんですか？」
暗くて見えずらいが確かに右手にかなり大きい袋を持っている。
「ああ、これかいこれ明日店で出す肉だよ。恥ずかしい事に肉屋なのに肉を切らしてしまってね」
「なんでこんな所に居るんですか？」
「いや、だから肉を買った帰りで」
「じゃあ、どこで買ったんですか？」
「大通りのスーパーだよ」
「なんの肉を買ったんですか？」
「え！あ、ああ、えーと豚と牛だよ。鶏肉はまだ店に残っているんでね」
「すみませんが、見せてくれませんか？」
「えっと、どうしてだい？」
「ちょっと、岸原先輩どうしたんですか？」
小西が答えた時、不穏な空気を感じ矢島が聞いてくる。
「なんか変な臭いがするんですよ。肉、ちゃんと血抜きはしたんですか。ちょっと気になりましてね。袋の中、見せていただけませをか」
「……今日はもう遅い私が送ろう」
小西が俺の問いを無視した。
「袋の中、見せていただけませをか？」
「親御さんも心配してるぞ」

「袋の中、見せていただけませをか？」
俺は小西の言葉を無視し同じ質問を繰り返すた。すると小西の雰囲気が変わってきた。
「……君はしつこいなぁ、そんなに袋の中が知りたいのかい？仕方がないな。なら教えてあげるよ」
そう言うと、左手をゆっくりと後ろに回した。
「さっきそこで会った少年だぁ！」
突然袋を俺に投げ付け左手に持ったナイフで切り掛かってきた。ナイフと言っても折りたたみ式の小さい物じゃない中華包丁みたいな馬鹿でかい斧みたいなナイフだ。
間一髪で俺はかわした。
「チィッ、逃げるなぁ！」
「テメェ！」
宮本が横から殴り掛かろうとした！がナイフを振り回し近寄れない。
「おい！ひとまず逃げるぞ！」
俺の掛け声にぼうけてた尾形がはっとし
「そうだ！急いで僕について来て！」
尾形を先頭に部員達が逃げていく。
「逃がすかぁあああ！！」
ものすごい剣幕で小西が追い掛けて来る。
「あいつが使っているナイフは多分ブッチャーナイフだ」
高原が走りながら言った。
「なんだ？ブッチャーナイフって」
俺が聞くと
「屠殺用のナイフだよ。
骨や筋を切る為のナイフだ。あんなので切られたら腕位簡単に落とされちゃうよ」
「肉屋御用達って訳か」
俺が皮肉を言った。
「あ！」

高原の馬鹿が転んだ。すぐ後ろを走ってた俺を巻き込んで
「コラァ！しっかりしろぉ！」
「す、すみません、イッツ」
「どうした？」
高原の様子が変だ
「足……くじいちゃいました」
どうやら立てそうも無いようだ
「仕方無いな」
そう言うと、俺は追い付いた小西と対峙した。
「なんで人を殺すんだ？」
俺は小西に聞いた。
「楽しいからだよ。岸原君。私はね、何かを殺すのがね、だぁい好きなんだよ」
「ふーん、なんで？」
「君もやってみれば解るよ。生きる力に満ちた者達が私の手、そう私の手によってなんの力も感じない死体に変わる。その瞬間なんて最高だよ」
小西は興奮しながら言った。
俺は話を聞きながら小声で高原と相談した。
「走れそうか？」
「すみません、まだ無理です」
「そうか」
俺は小西に向かって
「なんで殺した奴の肉持って帰るんだ？」
興奮しながら話していた小西は少し嫌そうな顔をしたが。
「ん～それはね。もちろん食べる為だよ。楽しめて食費も浮く！まさに一石二鳥だよ！」
と答えた。
ヤッベーこいつまじ狂ってるどうしょうかな？なんて考えていると
「もう聞きたい事は無いのかい？じゃあそろそろ良いかな？大丈夫、

君達は明日、店に並べるから無駄にはならないよ」
「待て！最後に一つ聞いて良いか！」
「なんだい？」
俺は質問を必死に考えた。
「あ！」
俺は思わず声を出した。
「どうしたんだい？」
「おい！後ろの奴は誰だ？」
小西の後ろに何かが忍び寄ってきたのが見えた。
「え？後ろ？」
小西が振り向こうとした瞬間、八メートルは離れていた筈なのに一瞬にして小西の真後ろに現れた。
「うわぁ」
小西は驚いて転んだ。無理もない。
そいつは暗闇でも解る位の真っ赤な髪でランランと輝く赤い瞳をしていた。
「あ、赤い殺人鬼か？」
俺は思わず呟いた。服装こそ赤くなかったか絶対にこいつが赤い殺人鬼だと思った。
「ヒィ！」
あまりの恐怖に高原が悲鳴を上げ気絶してしまった。
「なんだ、お、お前、な、何者だ！？」
小西はナイフを向けながら聞いた。
「いけないな」
赤い殺人鬼がポツリと呟いた。
「な、何だって？」
小西が聞き返すと
「いけないなぁあああ！！刃物を人に向けたらぁぁ！！いけないなぁぁ！！人を楽しみで殺したらぁぁ！！いけないなぁぁ人を食べたらぁぁ！！」

「うわぁ」
突然大声を出した赤い殺人鬼に小西が驚いてナイフを落とした。
「いけない！いけないよ小西さん！そんな事したら俺が殺すよ！殺しちゃうよ！というか今殺す！！」
赤い殺人鬼が小西の腕を掴んだ
ミシミシミシミシ…バキ…ブチ…ブチブチブチブチ…ブツン……ボトッ
「ギャアアアアァァ」
小西の右腕が肩からちぎれた。小西の腕はマッチョという程では無いがかなりの筋肉質だ。それを安々と赤い殺人鬼はちぎってしまった。
「おいおい、ありえないだろ」
俺は思わず呟いた。
「俺の腕が！俺の腕が！」
小西が叫んでいる。
赤い殺人鬼はニッコリ笑い。
「これで、刃物を人に向けられないね」
と嬉しそうに言った。
「ふざけるなぁ！」
残った左手でナイフを掴んで切り掛かった。
「ああそうか左手もあったな」
親指と人差し指でナイフを受めながらまたニッコリ笑い。
グニョ
ナイフが曲がった。
「な、何なんだよお前は！！」
残った左手を掴まれながら小西が聞いた
ミシミシミシミシ…バキ…ブチ…ブチブチブチブチ…ブツン
「ギャアアアアァァ」
「俺はねぇ～正義のみぃかぁたぁ～悪は許さない！」
ちぎれた腕を振り回し赤い殺人鬼の服装が段々赤く染まってくる。

「さて、これでほんとに刃物を人に向けられないね！それに楽しみで人を殺せなくなった」
「く、くそ化け物め！」
「失礼だな！正義の味方って言ってるだろ。最後は人を食ったその口だ」
赤い殺人鬼は小西の頭と首を掴んだ
「おい、まさか」
思わず俺は口を挟んでしまった。
「ん～何だい君は？悪かい？」赤い殺人鬼が俺を見た。
「いや、悪じゃない」
悪と言えば絶対殺されると思い俺は即答した。
「そうか！こいつに襲われてたんだな？もう大丈夫だぞ。安心しなさい」
「ありがとうございます。連れが怪我してるのでもう行ってもいいですか？」
俺はこの場を切り抜ける為必死だった。
「ああ！それはいけないな早く病院に連れていきなさい。ついて行きたいんだけど俺は悪人退治に忙しいんだ。悪いね」
「大丈夫です。俺の怪我はたいしたことないんで」
「そうか！良かったな。ああそうだ、俺と会った事は秘密だぞ」
「なぜですか？」
「正義の味方の正体は秘密なのさ」
赤い殺人鬼は気取って言った。
「……分かりました」
俺は高原を担ぎながら俺は赤い殺人鬼から離れた。しばらくして
「ギャアアアアァァ――――アバブブチブチブチブチ」
おそらく小西は死んだだろう。
俺は携帯で尾形に電話した。
「もしも
「おい！岸原無事なのか？」

尾形が大声で聞いてくる。俺はため息を吐きながら
「やれやれ、なんとかな」
「高原はどうした？」
「俺の背中で寝てるよ」
「怪我は無いのか？」
「俺はね。高原は足をくじいた。」
「大丈夫なのか？」
「まあ、大丈夫だろ」
「分かった早く戻ってこい！みんな心配してる。北入口に居るから」
「分かっよ。すぐに行く。もう切るぞ」
「早く戻ってこい」
電話を切った。
「やれやれ」
俺はため息をつきながら北入口に向かった。

第二話　赤（後書き）

次回は赤の思い。赤い殺人鬼を主人公にした話です。

赤の思い（前書き）

赤い殺人鬼の話です。

赤の思い

俺は土御門セキト！正義の味方だ！
いつも夜の町を歩き回り悪を倒している。
俺は、子供の頃から赤髪で赤目で最初は少し虐めらていた。でも小学生の時から大人並みの腕力とまるで猿のようのな身のこなしができた。俺は大人から気味悪がられたが子供からはヒーロー扱いされるようになった。それに俺はレッドだからな。
おっと、いけない。昔の事はどうでもいいか今は、この町を守る事が第一だ。夜の町に俺はおどりでた。
しばらく見回りと
「む！あれは」
人気が無い所で一人の学生を二人組が囲んでいる。
「カツアゲか？」
俺は音を立てずに忍び寄った。
「おい、悪いんだけど金貸してくんね。俺ら遠くから来てバイクの燃料費が馬鹿になんないんだ」
「そうそう、金が無い俺らに恵んでくれませんか？」
「こ、こまりますよ。これは、学費なんですよ！」
ドスッ！！
「ウッ」
「そんなの俺とは関係ないなぁ！」
「そうそう、関係ない、関係ない」
こいつ等は悪だ！そう思い俺は背後から声をかけた。
「いけないな」
背後からの声に驚き二人が振り向いた。
「ん？なんだ？お前……ひぃ」
俺の髪と目に気付いたようだった。
「お、お前、もしかして赤い殺人鬼か？」

なんか失礼な事を言ってきた。
「いけないなぁぁぁあああ！！」
俺は大声を上げた。
「うわぁ！」
「ヒッ！」
「いけないなぁぁぁ！人を脅したらぁぁぁ！いけないなぁぁぁ！人のお金をとったらぁぁぁ！いけないなぁぁぁ！人を殺人鬼呼ばわりしたらぁぁぁぁあああ！！！」
「な、な」
「なんなんだ？」
「いけない、いけないよ！そんな事したら！そんな事したら俺が殺すよ！殺しちゃうよ！というか今殺す！！」
いつものように叫び右の男の左手と左の男の右手を掴んだ。
ミシミシミシミシ……バキン
「ギャアアアア！！」
「ガアアアアア！！」
俺は二人の骨が折れた腕を掴んだまま振り回した。
ゴシャッ！　メキョッ！　バキョッ！　ドシャッ！
二人が壁や地面にたたき付けられ体が潰れた。しばらくすると悲鳴が聞こえ無くなった。
よしこれでこいつ等も人を脅せないし、人からお金を取れないし、人に失礼な事も言えない。
俺は満足しカツアゲ二人組を離した。
ゴシャ！！　ドチャ！！
「やあ、大丈夫かい？」
不幸な学生を見た。
かわいそうに気絶している。
少し悩んだ。しかし！いつまで彼に構っているわけにはいかない。
まだまだこの町には、悪がいる！
俺はその場を離れまた夜の町を歩き始めた。この俺が愛する町を守

る為！

赤の思い（後書き）

次は緑か青です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5606f/

赤と緑と青と

2011年1月16日14時49分発行